

| | | | | |
|--|----------|----------------------------------|-----------------------------|------|
| 11 | 課題番号 | 研究課題名 | 研究代表者 | 評価結果 |
| | 14104017 | 膜蛋白質相互作用解析のための構造生物学的戦略の開発とその応用 | 嶋田 一夫 (東京大学・大学院薬学系研究科・教授) | A |
| <p>(意見等)</p> <p>膜蛋白質の構造を生理的条件下で研究することは非常に困難である。最も強力な研究方法であるX線結晶構造解析の場合は、結晶状態という生理的条件と異なった環境で行われるためどうしても限界がある。研究代表者らは、転移交差飽和法という新しいNMR解析法を開発した。その結果、膜蛋白質のような大きな系でもリガンド等との相互作用面を溶液NMRで解析出来るようになり、生理条件下での膜蛋白質の構造と機能の研究への道を拓いた。</p> <p>これらの成果は幾つかの著名な雑誌に報告されており、期待通りの成果が得られている。ここで開発された方法は膜蛋白質の系だけではなく他の蛋白質にも応用可能であり、今後の展開が期待される。</p> | | | | |
| 12 | 課題番号 | 研究課題名 | 研究代表者 | 評価結果 |
| | 15109002 | 脳神経細胞の生死制御機構解明：新規因子発見と脳変性疾患モデル作出 | 野村 靖幸 (北海道大学・大学院医学研究科・招聘教員) | A |
| <p>(意見等)</p> <p>研究代表者は神経細胞の生死に関わる分子の探索を主たる研究テーマとして掲げ、それらの細胞内における動態の破綻が神経変性疾患を引き起こすという考えで研究を進め、その治療戦略をも視野に入れ研究を推進してきた。</p> <p>本研究成果は、(1) カスパーゼ結合蛋白質GMEB1の単離とGMEB1によるニューロン死の抑制効果、(2) 蛋白質ジスルフィドイソメラーゼによるニューロン死の抑制機構、(3) 4-フェニル酪酸による小胞体ストレスに依存した細胞死抑制効果、(4) その他の脳神経変性疾患に対する細菌由来CpGDNAの作用機序に関する研究、に大別される。</p> <p>これらの成果は既に相応の雑誌に報告されているが、発表論文のレベルからすると学問的価値がすこぶる高いとはいえない。</p> | | | | |